

令和4年度(2022年度) 研究員派遣による学校支援に関する研究(道徳科)

生徒自らが学びを振り返りながら学習し、 成長を実感できる中学校道徳科の授業改善

— 1人1台端末を用いた学習履歴を組織的に活用することを通して—

内容の要約

本研究では、道徳科の授業の中で生徒の道徳性を養うために、生徒自らが成長を実感できるようにすることを目指した。そのために、評価の視点を踏まえた授業構想をしたり、個に応じた評価とフィードバックを充実させたりした。また、生徒が記述・蓄積した学習履歴「M-ログ」をはじめとした記録を、同学年を担当する指導者で組織的に共有・分析することで、指導者の指導と評価に対する理解が深まり、道徳科の授業改善につながった。さらに、生徒自らが、それらの学習履歴の整理・見直しをすることで、自身の道徳性に係る成長を実感することができた。

キーワード

生徒自らが成長を実感

評価の視点を踏まえた授業構想

個に応じた評価とフィードバック

学習履歴「M-ログ」

学習履歴の整理・見直し

目		次	
I	主題設定の理由	(1)	VI 研究の内容とその成果 (4)
II	研究の目標	(1)	1 研究協力校における現状の把握と
III	研究の仮説	(2)	授業構想 (4)
IV	研究についての基本的な考え方	(2)	2 組織的な取組による授業改善 (6)
1	指導と評価における学習履歴「M- ログ」の効果的な活用	(2)	3 学習履歴「M-ログ」を活用した実 践 (7)
2	指導と評価の充実および組織的な 取組	(3)	4 生徒と指導者の変容 (9)
3	研究成果の検証	(3)	VII 研究のまとめと今後の課題 (12)
V	研究の進め方	(4)	1 研究のまとめ (12)
1	研究の方法	(4)	2 今後の課題 (12)
2	研究の経過	(4)	文 献

生徒自らが学びを振り返りながら学習し、成長を実感できる姿

学習履歴を活用した中学校道徳科の取組



「評価の視点」に基づいた振り返りの

整理・見直し

線引きや言葉掛けによる

個に応じた評価と
フィードバック



指導者
組織的な取組

授業や振り返りを通した

道徳的
価値の理解

生徒

1人1台端末の活用

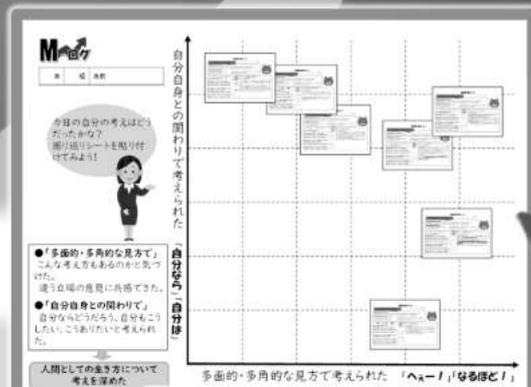


これまでの学びを
振り返りながら

記述・蓄積

「評価の視点」を踏まえて
ねらいを明確にした

授業構想



学習履歴

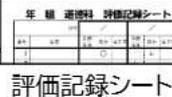
M-ログ

道徳科の授業を中心とした循環

道徳科の授業を中心とした循環

指導者間で学習履歴を

共有・分析



令和3年1月『令和の日本型学校教育』の構築を目指して(答申)より

学習履歴(スタディ・ログ)をはじめとした様々な教育データの蓄積・分析・活用することで、学習成果の可視化、きめ細かい指導や学習評価が可能となる

令和3年5月「全国学力・学習状況調査[学校質問紙]」より

Q.「教員は、学習履歴(スタディ・ログ)をはじめとした様々な教育データを生徒の状況に応じた指導に活用していますか」

A.「よく活用している」「どちらかといえば活用している」

滋賀県34.3%(全国比-4.8)

令和3年度研究員派遣による学校支援に関する研究(道徳科)

成果 個に応じた評価とフィードバックの組織的な取組ができた

課題 生徒自らがこれまでの学びを振り返ることが不十分であった

研究員派遣による学校支援に関する研究(道徳科)

生徒自らが学びを振り返りながら学習し、 成長を実感できる中学校道徳科の授業改善

－ 1人1台端末を用いた学習履歴を組織的に活用することを通して－

I 主 題 設 定 の 理 由

中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道徳編(以下、学習指導要領解説という。)では、道徳科の目標として「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」¹⁾と示されている。また、その目標を達成するために「生徒自らが成長を実感したり、これからの課題や目標を見付けたりして、人間としての生き方についての考えを深める学習ができるよう工夫する必要がある」¹⁾と述べられている。さらに、生徒が行う自己評価や相互評価について、「学習の在り方を改善していくことに役立つものであり、これらを効果的に活用し学習活動を深めていくことも重要である」¹⁾と示されている。これらのことから、道徳科の授業において、生徒が自らの学びを振り返りながら学習していくことで、生徒が自らの道徳性に係る成長を実感し、学びが深まるのではないかと考えた。

また、「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して(答申)」(令和3年1月)では、「学習履歴(スタディ・ログ)をはじめとした様々な教育データを蓄積・分析・利活用することにより、児童生徒自身の振り返りにつながる学習成果の可視化がなされるほか、教師に対しては個々の児童生徒の学習状況が情報集約されて提供され、これらのデータをもとにしたきめ細かい指導や学習評価が可能となる」²⁾とある。道徳科の授業において、生徒の発言や振り返りの記述といった学習履歴の活用は、生徒自身が学習を振り返ることと、指導者による指導と評価の充実や改善を図ることに効果的だと考えられる。しかし、令和3年5月に実施された全国学力・学習状況調査の本県の回答集計結果[学校質問紙]において、「教員は、学習履歴(スタディ・ログ)をはじめとした様々な教育データを生徒の状況に応じた指導に活用していますか」という設問に対して、「よく活用している」「どちらかといえば、活用している」と回答した学校の割合が、本県では34.3%(全国比-4.8)にとどまった。

当センターでは、令和3年度研究員派遣による学校支援に関する研究(道徳科)において、同学年を担当する指導者間で指導と評価についての共通理解を図り、個に応じた評価とフィードバックを共有、検討する組織的な取組を進めた。その結果、生徒が道徳的価値や人間としての生き方についての自覚を深め、自らの成長を実感する姿につながった。しかし、毎回の道徳科の授業において、生徒自らがこれまでの学びを振り返ることに課題が残った。

そこで、本研究では、生徒が1人1台端末を用いて、毎時間の授業での気付きや振り返りといった学習履歴を記述・蓄積し、これまでの学びを生徒自らが振り返りながら学習していく。そして、指導者がICT機器を活用しながらその学習履歴を共有・分析し、授業の省察や個に応じた評価とフィードバックの組織的な取組を進める。そうすることで、生徒自らが成長を実感できる道徳科の授業改善につなげることができると考え、本主題を設定した。

II 研 究 の 目 標

生徒自らがこれまでの学びを振り返りながら学習していくとともに、指導者が組織的に評価とフィー

ドバックを行うことで、生徒がより成長を実感できる道徳科の授業改善を目指す。

Ⅲ 研究の仮説

生徒が1人1台端末を用いて、毎時間の授業での学習履歴を記述・蓄積し、これまでの学びを生徒自らが振り返りながら学習していくとともに、指導者はその学習履歴を共有・分析しながら、個に応じた評価とフィードバックの組織的な取組を進めることで、生徒が成長を実感できる指導につながるだろう。

Ⅳ 研究についての基本的な考え方

1 指導と評価における学習履歴「M-ログ」の効果的な活用

生徒が、1人1台端末を用いて学習履歴を記述・蓄積していくためのシートとして、学習履歴「M-ログ」¹⁾(以下、「M-ログ」という。)を開発した(図1)。学習指導要領解説では、道徳科の授業において「多面的・多角的な見方へと発展させたか」と「自分自身との関わりで考えを深められたか」の二つの視点で、学習状況や道徳性に係る成長の様子を見取り、「人間としての生き方について考えを深めている」姿を評価することが求められている。そこで、本研究では、これら二つの視点を「評価の視点」として取り扱うこととし、示された七つの例とともに整理した(図2)。「M-ログ」は、二つの「評価の視点」を横軸と縦軸で表し、本時の授業での学びがどこに位置するかを生徒自らが考え、配置できるようにする。こうすることで、学習履歴が可視化され、生徒はこれまでの学びと比較しながら、その授業を振り返ることができる。また、学校や生徒の実態に応じて、それぞれの軸の表記を変更したり、活用しているアプリケーション等に合わせて、別に記述した振り返りシートのスクリーンショットを貼り付けたり、「M-ログ」の中にテキストボックスを直接設けたりするなど、アレンジが可能である。学期末には、生徒が自ら蓄積した学習履歴を見返したり、並べ直したりすることで、自らの成長を実感できるように振り返りの授業を実施する。

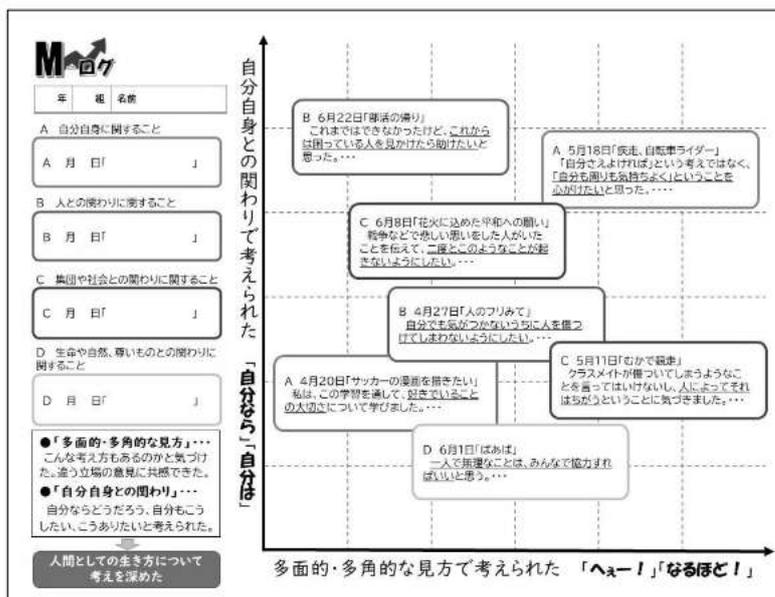


図1 生徒が振り返りを整理するシート「M-ログ」(内容は一例)

整理した(図2)。「M-ログ」は、二つの「評価の視点」を横軸と縦軸で表し、本時の授業での学びがどこに位置するかを生徒自らが考え、配置できるようにする。こうすることで、学習履歴が可視化され、生徒はこれまでの学びと比較しながら、その授業を振り返ることができる。また、学校や生徒の実態に応じて、それぞれの軸の表記を変更したり、活用しているアプリケーション等に合わせて、別に記述した振り返りシートのスクリーンショットを貼り付けたり、「M-ログ」の中にテキストボックスを直接設けたりするなど、アレンジが可能である。学期末には、生徒が自ら蓄積した学習履歴を見返したり、並べ直したりすることで、自らの成長を実感できるように振り返りの授業を実施する。

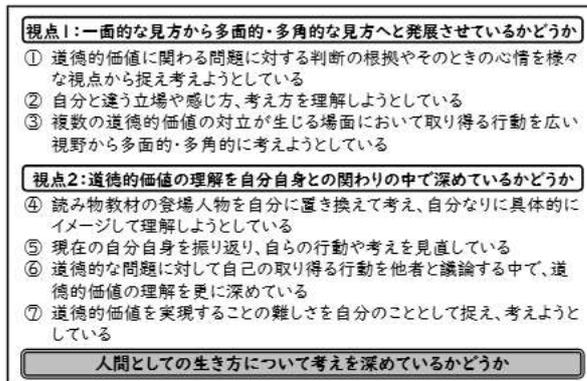


図2 二つの「評価の視点」と七つの例

1) 「M」は「まなび」「モラル(道徳)」「Myself(自分自身)」の頭文字を取ったもの。

自身の理解も進むよう、フィードバックの内容を指導者間で検討していく。

2 指導と評価の充実および組織的な取組

指導者は校務支援ソフトや協働学習ソフトでICT機器を積極的に活用して、道徳科の指導と評価に組織的に取り組むことで、指導者間で情報を効率よく共有し、指導と評価の充実を図る。

日々の授業実践においては、令和3年度研究員派遣による学校支援に関する研究(道徳科)の研究成果物である「授業構想シート」(図3)および「評価記録シート」(図4)を用いる。

まず、授業を計画する際には、「授業構想シート」を用いて、主題や内容項目、それに関わる道徳的価値観を確認し、「評価の視点」を基に目指す生徒の学びの姿を想定する。そして、授業後に同学年を担当する指導者間で、生徒の記述や発言、授業の様子を記録した動画、生徒の振り返り等を基にして授業を

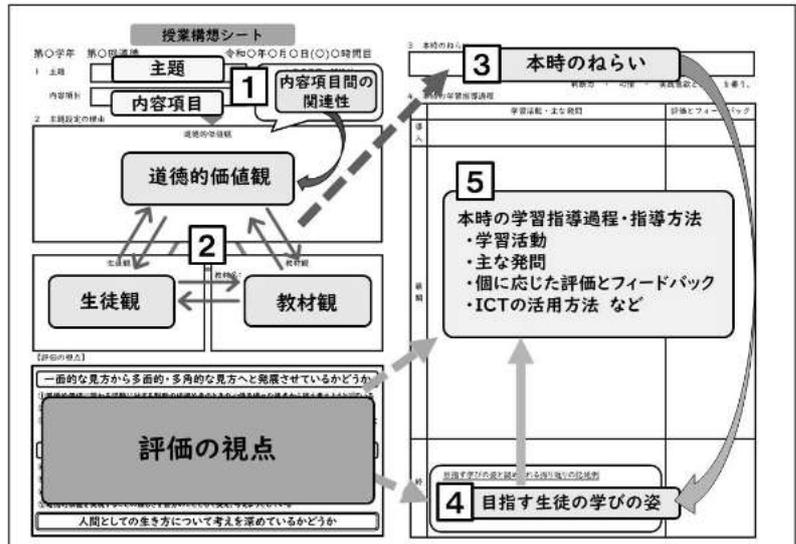


図3 授業構想シート

○年○組 道徳科 評価記録シート		○…記述(振り返り含む) レ…発言							
番号	名前	多面的・多角的な見方		自分自身との関わり		多面的・多角的な見方		自分自身との関わり	
		多面	多角	自分	生き方	多面	多角	自分	生き方
1	生徒1			○				レ	
2	生徒2				レ			レ	○
3	生徒3	○						レ	○
4	生徒4		レ			○			レ
5	生徒5							レ	
6	合計								

図4 評価記録シート(一部)

省察し、本時の展開や発問が、ねらいとする道徳的価値に迫るために適切であったか確認をする。この省察を毎時間、継続的に行うことで、指導者が道徳的価値に対する理解を深めたり、「評価の視点」に基づいた授業構想ができたりするようになる。その際、授業で生徒が記述した「M-ログ」を用いることで、指導者は生徒の学びを視覚的に分析しやすく、本時の授業が生徒にとって成長を実感できるものであったかどうかという視点でも省察することができる。

さらに、複数の指導者で生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を見取るために、指導者が交代で学年の全学級を回って道徳の授業(以下、ローテーション道徳という。)をしたり、指導者同士で授業を参観し合ったりする機会を設ける。その際、指導者は授業中の記述や発言、様子を「評価記録シート」に記録する。それをデータ化し、ICT機器を用いて指導者間で共有できるようにする。ここには、それぞれの生徒が「多面的・多角的な見方」と「自分自身との関わり」について発言があったかということや、道徳的価値に迫る考えが記述できているかということが表れるため、授業後の省察や生徒の評価に活用する。

3 研究成果の検証

「M-ログ」を中心とした生徒の記述や発言、様子、また、生徒と指導者への質問紙調査や聞き取り調査等を基に、研究の成果を検証する。特に生徒の発言や様子は、研究始期から「評価の視点」を踏まえて記録することで、研究始期から終期にかけての変化を見取ることができるようにしておく。あわせて、学習履歴は、ICT機器を用いて「評価の視点」ごとに集約するなど分析方法を工夫する。

V 研究の進め方

1 研究の方法

- (1) 研究協力校の道徳科における生徒および指導者の質問紙調査や聞き取り調査から、各校の実態や課題を把握し、本研究の目標に沿って学校支援の内容を設定する。
- (2) 生徒の学習状況を把握したうえで、指導の意図を明確にし、「評価の視点」を踏まえた授業を指導者と協働して構想する。
- (3) 授業における生徒の学習状況と道徳性に係る成長の様子について、学年の指導者とともに分析し、生徒にフィードバックする。
- (4) 授業における生徒の姿や、生徒が1人1台端末を用いて記述・蓄積した学習履歴を基に、指導者との授業の省察を通して、授業改善に取り組む。
- (5) 派遣研究協議会を実施し、各校での取組について交流・協議する。
- (6) 研究協力校での取組内容、成果と課題についてまとめる。

2 研究の経過

4月	研究構想、研究推進計画の立案	11月	生徒・指導者質問紙調査(第2回)の実施と分析
4月～11月	派遣研究(中学校2校、原則各校週1回派遣)		第2回派遣研究協議会
5月～6月	生徒・指導者質問紙調査(第1回)の実施と分析	11月～12月	研究論文原稿執筆
8月	第1回派遣研究協議会	1月	研究発表準備
夏季休業中	2学期に向けた授業構想	2月	研究発表大会
		3月	研究のまとめ

VI 研究の内容とその成果

1 研究協力校における現状の把握と授業構想

研究始期には、授業の参観や指導者への聞き取りを通して、研究協力校2校の現状を把握することとした。各校の現状として共通していたことは、道徳教育推進教師や各学年の道徳担当が中心となり、年間計画やそれぞれの授業の展開について共通理解を図りながら実施していること、また、生徒が授業の終末に記述する「振り返りシート」について、学年で統一されたものを活用していることである。しかし、振り返りの記述やワークシートに対する評価とフィードバックの方法は、学級通信にまとめたり、直接線引きやコメントを書き込んだりする等、どちらの学校も指導者によって異なっていた。さらに、学級通信に取り上げる生徒の選び方や線を引く箇所については、指導者の主観によるところが大きく、道徳科の授業を担当している指導者20人を対象とした質問紙調査においても、「根拠をもって道徳科の評価を行っているか」という質問に対して、約4割の指導者が「どちらかといえば、当てはまらない」と答えた。このことについて、指導者に詳しく尋ねると、道徳科の評価が漠然としていて、不安を感じているとのことであった。

そこで、まずは各指導者が道徳科の「評価の視点」について理解し、生徒の記述に対して根拠をもって評価やフィードバックができるようにするため、「授業構想シート」を用いて「評価の視点」を踏まえた授業構想をしていくように提案した。

A中学校第1学年で6月に行われた授業(p.5の表1)を例に、「評価の視点」を踏まえた授業構想の実際と授業における言葉掛けの効果について以下に述べる。

(1) 「評価の視点」を踏まえた授業構想の実際

表1 授業の概要

内容項目	A 自主、自律、自由と責任	主 題	誠実な行動
ねらい	自分の行動に伴う責任を誠実に果たそうとする道徳的実践意欲と態度を養う		
教材名	裏庭のできごと(廣済堂あかつき)		
教材の概要			
<p>主人公の健二と大輔、雄一の3人は、ボール遊びが禁止されている学校の裏庭で、鳥のひなを狙う猫を追い払うためにボールを投げ、窓ガラスを割ってしまう。ボールを投げた雄一はすぐ職員室に行き、先生に報告するが、その間に遊んでいた健二は、再び窓ガラスを割ってしまう。1枚目の件と混同され、健二が窓ガラスを割ったことはうやむやになるが、そのことで健二はもやもやした思いを抱える。さらに、正直に言いに行くべきかと悩む健二は、一緒に遊んでいた大輔から黙っているように釘を刺され、いっそう悩んでしまう。</p> <p>しかし、翌日、健二は覚悟を決めて、先生に正直に言いに行くと大輔に告げる。すると、大輔も後を追うように先生のところに向かう。</p>			

本時の中心発問を設定する際に、指導者ははじめ、健二が窓ガラスを割ったことを、正直に「言いに行くべき」か「言いに行くべきでない」かの対立構造を利用し、生徒に議論させる展開を設定していた。登場人物の葛藤の場面に中心発問を設定することで、生徒は活発に議論し、道徳的価値の理解が進むと考えたからである。しかし、最終的に生徒がどのような振り返りの記述をすれば、本

展開

◎健二に正直に「謝りに行くべき」か、「行くべきでない」か、アドバイスをするとしたら、どう言いますか。
※タブレットで「行くべき」→青、「行くべきでない」→赤というカードを作って、提出ボックスに返る。二択で良い?

行くべき

- ・言わないと主を責めるよ。「行くべきだね...悩む」
- ・後でどうせバレるよ。 ような考え方を取り上げたい。
- ・人として行くべきだよ。

行くべきでない

- ・行ったらすぐ怒られるよ。
- ・本職を真切ってるもいいの。
- ・わざわざ面倒ごとを増やさなくてもいいよ。

◎正直に言いに行くと決めて職員室に向かう健二は、どのような顔をしていただろう。

- ・覚悟を決めた顔
- ・スッキリした顔
- ・不安がなくなって安心している顔

揺れ動く健二の気持ちに共感できているか【机間支援、言葉掛け】

全体で発表
友達の多様な意見を踏まえながら、健二の心の葛藤を深めていく【挙手発表、意図的指名】

単純な二択ではない。
微妙な感情をどうするか。
健二の心の変化を捉え、正しく行動すると自分自身に良い変化が現れることを捉える【挙手発表】

図5 「授業構想シート」(一部)(メモ書きは筆者)

時のねらいに迫ったといえるのかを想定したときに、この中心発問では不十分であると考えた。なぜなら、これまでの指導や道徳的価値から考えたときに、少なくとも「正直に言う」ことは正しいことであると認識している生徒が多いと想定されるためである。すると、多くの生徒が「言いに行くべき」の立場を取ってしまい、十分な議論に発展しないと考えられた。そこで指導者は、中心発問を「言いに行くべき」か「行くべきでない」かの二択ではなく、言いに行くべきだと思う度合いを問うものにするすることで、より多様な考えを引き出すことにした。また、そのような葛藤がある中で、それでも「正直に言いに行く」ことを選択した健二の思いに迫ることで、「誠実な行動」につながる道徳性を育むことができると考えた。本時の展開について、指導者と筆者が協議の際に用いた「授業構想シート」の一部を図5に示す。

このように、目指す生徒の姿を「評価の視点」を踏まえてより具体的に想定することで、主題や内容項目とねらい、目指す生徒の姿を関連付けて授業を構想していくことができた。

(2) 授業における「評価の視点」を意識した言葉掛けの効果

本実践では、1人1台端末を活用して、主人公は「言いに行くべき」とする心の度合いを、0%から100%で表す「心情メーター」に記入し、全員の意見をスクリーンに映して共有した(図6)。そして、全体共有の前に、前後左右の生徒同士で互いの意見と、なぜそう考えたかの理由を交流した。その中で、ある生徒が、他の生徒の考えを聞いて、自分の考えを変えるという姿が見られた。指導者が



図6 「心情メーター」で意見を交流

そのことに気づき、「なぜ(自分の考えを)変えようと思ったのですか」と理由を尋ねると、生徒は「〇〇さんの考えを聞いて、なるほどと思ったから」と答えた。それを聞いた他の生徒も「他の人の考えを参考にしていよ」と気づき、その後のグループ交流では、他の生徒の考えを聞きながら、次々に自分の考えを変える生徒が見られた。このとき、生徒は友達の多様な見方に触れて、自らの考えを調整しており、「評価の視点」の一つである「多面的・多角的な見方へと発展しているかどうか」の点で考えを広げられた生徒の姿が見られた瞬間といえる。そして、この姿は、指導者が机間指導の中で生徒の様子を把握し、「評価の視点」を意識した言葉掛けによる的確なフィードバックをすることで生まれたものだと考えられる。

2 組織的な取組による授業改善

研究始期から、研究員は指導者とともに「授業構想シート」を活用し、「評価の視点」を踏まえた授業づくりをした。毎回の授業後は、研究員が授業を参観した際の写真や動画、生徒の発言や行動の記録、指導者が記入した「評価記録シート」や名簿等を基に、授業の省察や生徒の様子の交流を指導者間で行うなど、組織的に授業改善を進めた。それぞれの研究協力校における具体的な実践は以下の通りである。

(1) ローテーション道徳の実施

B中学校では、2学期の道徳科の授業において、約2か月の期間に渡りローテーション道徳を実施した(表2)。これに先立って夏季休業中に、教材を選定するための打合せや教材研究、授業構想を行った。実際の授業では、普段道徳科の授業をしている学級担任だけでなく、学級担任以外の指導者も加わり、9人の指導者が全5学級を順番に回った。その結果、学級担任が授業を参観することができ、授業中の生徒の様子を客観的に見取することで評価に生かすことができた。また、同じ授業を一人の指導者が複数回実施することから、教材への理解が深まり、「次はこう考えさせたい」「この活動にもっと時間を確保したい」というような授業改善にもつながった。

表2 ローテーション道徳の内容(①～⑤が学級担任、⑥～⑨は学級担任以外の指導者)

指導者	内容項目	教材名
①	A 自主、自律、自由と責任	ハインツの苦しみ
②	A 節度、節制	歩きスマホをどうするか
③	C よりよい学校生活、集団生活の充実	本当の優しさとは何か
④	C 遵法精神、公德心	二通の手紙
⑤	D よりよく生きる喜び	カーテンの向こう
⑥	D よりよく生きる喜び	二人の弟子
⑦	B 相互理解、寛容	言葉の向こうに
⑧	B 相互理解、寛容	島耕作 ある朝の出来事
⑨	A 自主、自律、自由と責任	だいふくじょう 大炎笑(ネットでの炎上疑似体験カードゲーム)

さらに、お互いの授業を参観し合うことで、指導者の間で、発問の効果について協議したり、生徒の様子について評価したりする機会が増えた。参観の際には、「評価記録シート」を使用し、生徒の様子を記録していくことで、その後の協議も充実し、学級担任はスムーズに評価とフィードバックを行うことができた。

このように、ローテーション道徳を実施することは、授業づくりおよび生徒の評価の面で効果的であった。

(2) 授業を省察する時間の充実

研究始期においては、道徳科の授業後に、研究員が指導者と授業の省察を行っていたが、2学期には、同じ学年の指導者同士が授業について協議することが増え、さらには学級担任以外の指導者もその協議に加わるようになった。特にA中学校の協議(p.7の図7)の中では、「M-ログ」に記入

された生徒の記述を見ながら、その日の授業での生徒の様子について交流したり、発問の改善を図ったり、次時の授業の構想を話し合ったりした。その中で、ある指導者から、「最近、どちらの発問の方が生徒の考えが深まるかを話し合ったり、提示する教材を他の先生と一緒につくったりして、道徳の授業が楽しい」という発言があり、組織的に授業の構想や省察を行って授業改善を図っていくことで、指導者のやりがいや充実感、自信につながり、授業づくりに対する意識が変容する姿が見られた。また、隣で協議の様子を聞いていた経験豊富な指導者が参加することで、ホワイトボードを用いた交流の仕方や、ロールプレイを取り入れることといった授業における様々な工夫を聞けることもあり、指導者間でよい刺激を生む結果となった。



図7 生徒の記述を見ながら、授業を省察する指導者

3 学習履歴「M-ログ」を活用した実践

「M-ログ」の導入にあたっては、まず1学期末に、各学校で従来使用していた振り返りシートを見て、「M-ログ」上で整理しながら学びを自己評価し、生徒自らが成長を実感する授業を実施した。

(1) 振り返りシートとの併用

B中学校では、これまで、生徒は1人1台端末上で、毎時間の振り返りシートを記入・蓄積していた。これを踏まえ、生徒は各時間の振り返りシートのスクリーンショットを貼り付ける形で「M-ログ」を活用した。また、横軸を、振り返りシートの言葉に合わせて「様々な思いを比較して考えられた」、縦軸を「自分に結び付けて考えられた」と変更した。

A中学校では、ハートマークを塗りつぶすことで、生徒がその時間の学びを自己評価する「心メーター」を設け、1枚のシートに学期全ての振り返りを蓄積していた(図8)。

第3回 5月6日	15の手紙		自分は誘惑に負けることが多く、それを自覚しているからこそなおしていかないとけないなと思、それに合った目標もたてた。後馬鹿生としてもやるべきことはきちんとやっていた。
第4回 5月12日	がんばれ心		自分で考えることは大事だなと思、た。ただ人の意見を聞いて、するので(は)なく、ちゃんと自分の考えもあくと。思った。松井さんが大きく成長されたことがたくさんあ、たので自分も成長できることが身近にあるのかなと思、た。
第5回 6月23日	平和への願い		広島へ修学旅行に行、たからこそいろんなことを感じる、ことが加、れた。私もアメリカが加害者だと思、ていたから、話を読んで、どちらの国も被害者であり、加害者であることがわ、かった。

図8 生徒a(A中学校)の振り返りシート(一部)

そこで「M-ログ」の活用に向け、まず、生徒も「評価の視点」を理解し、それに基づいて自己評価できるように説明を行った。指導者はあらかじめ、協働支援ツールを通じて、生徒の1人1台端末に「M-ログ」のデータを共有した。そして、生徒はそこに自らの振り返りシートを見ながら、教材名を書いたテキストボックスを動かしていくという方法で「M-ログ」を活用した。また、横軸は「多様な視点から考えられたか」と生徒にも理解できる言葉に変更した。

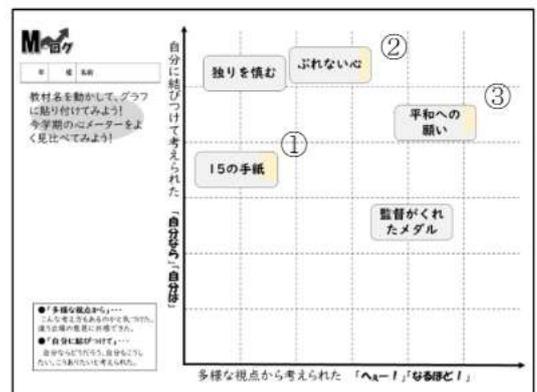


図9 生徒a(A中学校)の「M-ログ」(7月)

どちらの学校においても、生徒は、自らの振り返りシートの記述から、どのような学習だったかを思い返しながらか整理していき、近くの席の生徒と交流して「なぜそこに置いたの」と尋ねたり、「この話はすごく感動した」と感想を伝え合ったりしていた。

A中学校第3学年の生徒aが実際に記述した振り返りシートおよび「心メーター」(p.7の図8)と「M-ログ」(p.7の図9)を比較すると、「心メーター」上では同じ「5」の評価をした三つの授業に対して、「M-ログ」上では差をつけているということが分かる。この生徒に「M-ログ」上の配置について理由を尋ねたところ、「『15の手紙』(p.7の図9の①)や『ぶれない心』(p.7の図9の②)の授業では、具体的に自分の将来をイメージすることができて、『平和への願い』(p.7の図9の③)では、自分のこれまでの考え方を考えるような授業だったから」と振り返った。さらに、「平和への願い」は、直前に修学旅行で訪れた場所を舞台としていたため、「自分自身の経験と結び付けて考えることができた」とも話していた。これらのことから、生徒は「評価の視点」を基に振り返ったうえで配置しているということがうかがえた。

(2) 「M-ログ」による学びの実感

2学期以降は、どちらの中学校においても、毎時間の終わりに「M-ログ」上で、その時間の振り返りを行うようにした。その時間だけの自己評価だけでなく、これまでの振り返りとも比較しながら、どこに置くのかを考える生徒の姿が見られた。時には、これまでの振り返りを再度動かしながら考えている生徒もあり、道徳科における自らの学びの道筋を確認している様子であった。

B中学校の生徒bが記入した1学期(7月)と2学期(10月)の「M-ログ」(図10)を取り上げる。これを見ると、図10の①は、生徒bにとって、二つの「評価の視点」において学びを実感できた授業であったことが分かる。また、図10の②は、特に自分自身と結び付けて考えることができた授業、図10の③は特に多面的・多角的に考えることができた授業であることが分かる。実際に生徒bは、2回行った質問紙調査の「道徳の授業を通して、自分の成長を感じることもある」という設問に対して、第1回は「どちらかと言えば、当てはまる」とし、その理由を「なんとなく」と答えていた。

しかし、第2回では「当てはまる」と答え、その理由を「自分の意見だけでなく、他の人の意見も尊重できるようになったから」とした。このように、「M-ログ」を活用し、二つの視点で学びを振り返ることで、生徒自らが学びを視覚的に理解し、実感することにつながった。

(3) 「M-ログ」を活用した授業改善

生徒が自身の学びを振り返る際だけでなく、指導者がその授業について省察する際にも「M-ログ」を活用した。例えば、9ページの図11のような「M-ログ」の配置から、この生徒の中で「父の一言」の授業は、「多面的・多角的な見方に発展して考えられた」という視点でも、「自分自身との

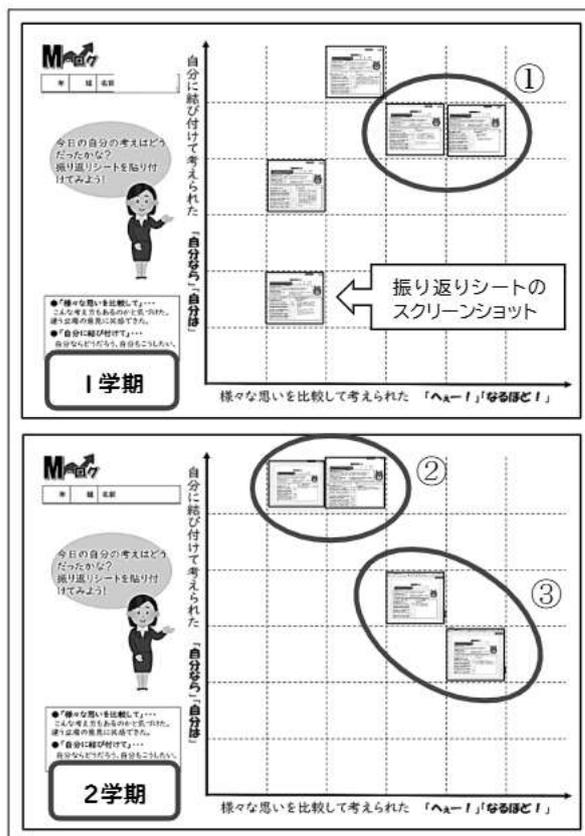


図10 生徒b(B中学校)の「M-ログ」(丸囲みや番号は筆者)

関わりで考えを深められた」という視点でも、あまり学びが深まらなかったと感じていることを指導者は見取った。そこで、その生徒に理由を尋ねると、授業中にペアで行ったロールプレイがうまくできず、主人公の立場から考えにくかったということが分かった。それを聞いた指導者は、ロールプレイを行う際は、学習のねらいを踏まえて、セリフや場面設定は必要に応じて細かく決めておくことが大切だったと振り返った。

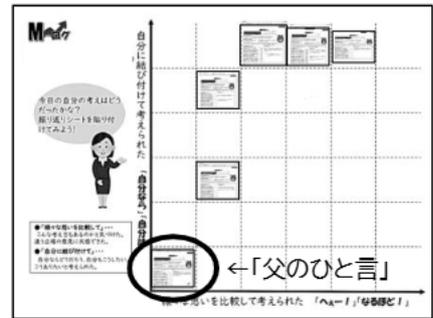


図11 生徒cの「M-ログ」(6月)

このように、「M-ログ」は生徒がその時間の学びを記述・蓄積するものであり、どの授業で成長を実感したかということが視覚的に表れやすい。したがって、指導者が授業後に、生徒の「M-ログ」を見ることで、その授業がどれだけ生徒の学びとなったかを見取りやすくなった。また、「M-ログ」を活用することで他の道徳科の授業とも比較しやすく、授業における展開の課題や発問の効果等を見直すことができた。

(4) 蓄積した学びを振り返り、成長を実感する授業

2学期末には、両校で再び「M-ログ」を用いた振り返りの授業を行った。ここでは、生徒が自らの成長を実感することにつながるために、「M-ログ」の記述について、グループの中で交流する活動を行った。まず、生徒は「M-ログ」の記述をもう一度見直し、改めて「評価の視点」と照らし合わせながら整理した。そして、生徒は自らの「M-ログ」を指さしながら、「この授業が一番自分のためになったと思います。なぜなら～」というように、それぞれの振り返りについて説明した。発表を聞いた生徒からは、「ああ、分かる分かる」と共感するつぶやきや「私はあの授業でこう思ったけれど、どうですか」と改めてお互いの考えを比較するような質問があり、生徒同士の交流から、それぞれの成長を確かめ合っている様子うかがえた。

本授業の終わりに、生徒は、今学期の道徳科の授業がどうであったかについて記述した(図12)。「自分自身の成長につながる」や「自分を見直す大切な時間」とあるように、生徒は道徳科の授業から自らの成長の実感を深めていることが分かる。また、自身のこれからの生き方について考えるときに、道徳科の授業が役立っている、役立つだろうと考えられるようになった生徒も見られた。

- ・道徳の時間で自分の考えを深めることができたと同時に、他の人とまったく違う思いや考えを聞いて、こんな見方もあるんだと物事を見る視野を広げることができました。
- ・ドナーの授業や自分の中の心を題材にしているものが多く、「他の立場だったらどうする？」という問いに考えを深めた。また、そのときにいろんな人がいろんな考えをもっているのを見て、より多く考え方が広がった気がする。
- ・初めて知ったことや、改めて感じられることがたくさんあって、自分自身の成長につながる時間だったかなと思った。
- ・2学期の道徳で学習したことを日常に生かしていくことをがんばれたと思います。道徳で学んだことでも、生活に生かさなければ意味がない、ということに気づき、日常に生かしていこうとがんばれました。
- ・どれも、自分についてや人との接し方等改めて考えさせられたことは多く、自分を見直す大切な時間になったと思います。
- ・道徳の授業を通して、より相手のことを考えて思いやりをもって、行動、発言できるようになったと思う。さらに、「絶対こうだ」と決めつけずに、一つの物事を様々な視点から捉えて考えることの大切さを発見した。
- ・道徳は自分に新しい考えを与えてくれたり、自分の生活を見直すきっかけになったり、世界には努力している人がこんなにいると示して、感動を与えたりしてくれるものでした。

図12 「M-ログ」を用いた振り返りの授業での生徒の記述(一部)(下線は筆者)

4 生徒と指導者の変容

(1) 授業改善による変容

ア 生徒の振り返りの記述の変容

本研究での実践を継続して取り組んでいったことで、生徒が毎時間の授業後に記述した振り返

りにも変容が見られた。

A中学校第3学年の生徒dは、研究始期である4月や5月の振り返りの記述では、文章量も少なく、「〇〇したいと思った」という記述ばかりであった(図13の①、②)。しかし、6月や7月になると、徐々にねらいとする道徳的価値に触れて記述するようになり(図13の③、④)、「多面的・多角的な見方」や「自分自身との関わり」で考えられている記述も増えた。これは、指導者が「評価の視点」に基づいて、「〇〇さんはこう思っているみたいだけれど、△△さんはどう思いますか」と、自分の考えを他の生徒と比較するような問いかけや、「あなたは どう思いますか」

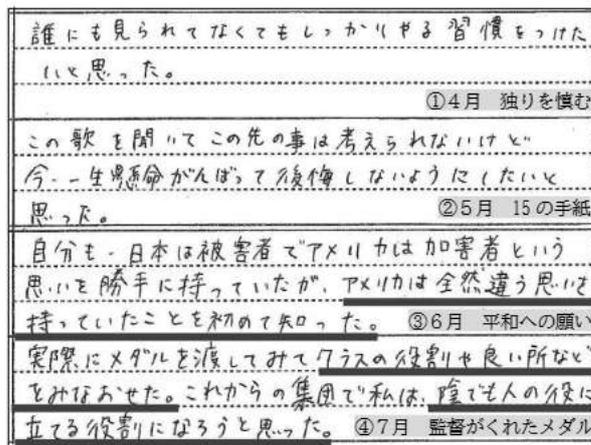


図13 生徒dの振り返りの記述(一部)
(下線、教材名は筆者)

「あなたならどう考えますか」と、生徒を主語にして考える発問を行ったことにより、生徒が「評価の視点」に沿って振り返るようになった成果と考えられる。

イ 指導者のフィードバックの変容

B中学校のある指導者は、生徒の振り返りの記述に対してコメントを書くことでフィードバックを行った。4月に行った授業では、生徒eは、「自分の言いたいことを伝えられるようにしたい」と振り返り、そのことに対するフィードバックを図14に示す。しかし、この授業は、内容項目「A 自主、自律、自由と責任」として計画されていたため、生徒eは、ねらいとする道徳的価値とは異なった理解をしている。

こうした中、「評価の視点」を踏まえて、授業の主題や内容項目等を丁寧に確認しながら授業構想を行ったことで、この指導者は図15のように、自分自身との関わりや多面的な考え方を重視するようなコメントや、ねらいとする道徳的価値に沿って生徒の記述を評価することが増えた。さらに、授業では、目指す学びの姿と判断できる記述をしている生徒を意図的に指名したり、生徒の発言に対する切り返しの発問をしたりするなど、学習展開にも工夫が見られた。

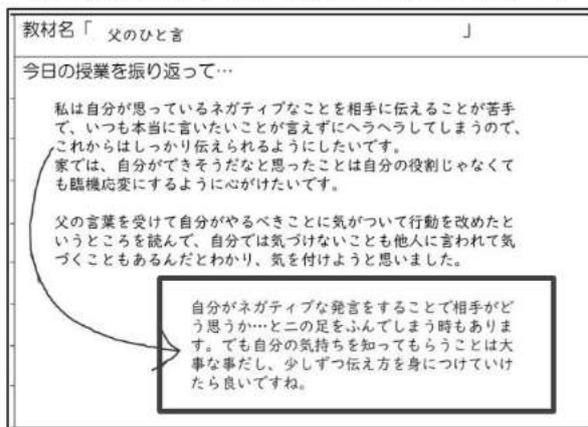


図14 生徒eの振り返りの記述(4月)
(囲み部が指導者。囲みは筆者)

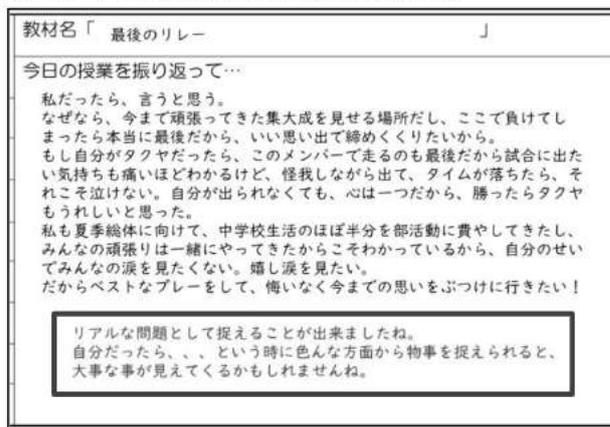


図15 生徒eの振り返りの記述(6月)
(囲み部が指導者。囲みは筆者)

(2) 質問紙調査から見る変容

本研究では、研究始期である5月から6月にかけてと、研究終期である11月に生徒と指導者を対象とした質問紙調査を実施した。その結果から見えてきた変容について述べる。

ア 学習履歴を活用することに対する生徒の変容

これまでの道徳科の授業での記録を、生徒が見返しているかどうかを問う設問(図16)に対して、肯定的な回答をした生徒は、研究始期には60%であったが、研究終期には66%に増えている。

これは、指導者が生徒の記述に対して評価とフィードバックを行い、それを生徒自身が受け止めていることや、「M-ログ」のように、一つのシート上で自らの学習履歴を整理していくことで、生徒自らがこれまでの記録を見返す際に視覚的にわかりやすかったからと考えられる。一方、否定的な回答をした生徒も40%から34%と減少したが依然として多い。全ての生徒が「M-ログ」をより効果的に活用できるように、シートの内容等の工夫、さらに、授業の導入で「M-ログ」を見ながら、これまでの学習を振り返るといった、指導者の授業づくりの面での改善等の検討を重ねていく必要がある。

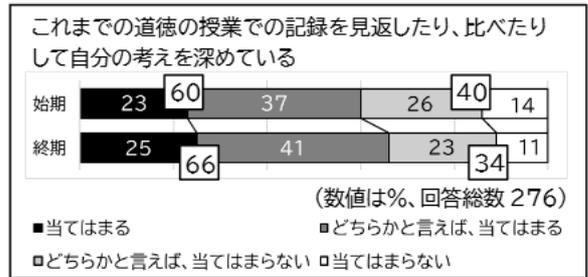


図16 生徒質問紙調査の結果

イ 生徒自らが成長を実感している姿

「道徳の授業を通して、自分の成長を感じることがある」という設問に対して、「当てはまる」「どちらかと言えば、当てはまる」と答えた生徒に、そう感じた理由を尋ねた(図17)。例えば、「物事を多角的に見る」ということや、「今までの自分の考えを改めたり、新しい考えや価値観が生まれたり」とあるように、道徳科における「評価の視点」を踏まえている記述が見られた。また、道徳科の授業が「未来につながる」というように、人間としてよりよい生き方を目指すための学びであるという実感をしている記述も見られた。さらに、記述の量そのものも増加しており、より具体的に振り返ることができていた。これらの記述から、研究終期においては、同じように成長を実感している生徒の中でも、道徳的価値の理解が着実に深まっている様子が見えた。

研究始期(6月)

- ・小学生の頃は、あまり人の気持ちが分からなかったけれど、道徳を通して分かるようになったのではないかと思ったから。
- ・過去の自分の考え方や捉え方と、変わったとを感じる事があるから。
- ・生活の中で相手の気持ちも尊重出来るようになったから。
- ・普段生活をしていて道徳をしていなかったら、相手の考えが分からず、自分の意見ばかり考えてしまうから。

↓

研究終期(10月)

- ・物事を多角的に見たり、自分の意見を客観的に見て相手の意見と比べたりすることで、様々な視点から考えることができるようになったから。
- ・道徳の様々な教材を通して、今までの自分の考えを改めたり、新しい考えや価値観が生まれたりしたから。
- ・物事の捉え方が広がり、様々な視点から物事を考え解決に導こうとすることが少しできるようになったから。
- ・自分と違った意見も否定せず、なぜそう考えているのかを考えて聞き、納得できるものはそのまま自分の意見として取り入れられるようになったと思うから。
- ・前までは自分自身のみの考えを主張し、「他の意見は間違っている」と決めつけていましたが、道徳で多様性の学習をしたときに、「こういう考えの人もいるんだな」と素直に相手の意見や主張を飲み込むことこそが大切だと学び、改善することができたから。
- ・自分がやっていたいなかったこと、自分が今からやろうとすること、「未来につながること」だから。

図17 生徒質問紙調査の自由記述(一部)(下線は筆者)

ウ 指導者の道徳科の評価に対する意識の変容

指導者に対する質問紙調査や聞き取り調査から、研究始期では、指導者は道徳科の評価に対して不安を感じている様子であった(p. 12の図18)。しかし、研究終期においては、これが改善され、道徳科の評価に根拠をもてていると答えた指導者が増えた。また、指導者への聞き取りの中でも「あらかじめ目指す生徒の姿を想定しておくことで、振り返りを見るときの視点がわかりやすくなった」「『M-ログ』は生徒の学びの様子が視覚的に分かるので、評価するときに役に立った」

というように、道徳科の評価に関する意見が多くあった。研究を通して「評価の視点」についての理解が深まったり、学習履歴の組織的な活用が増えたりしたことで、指導者の評価に対する自信につながったと考えられる。

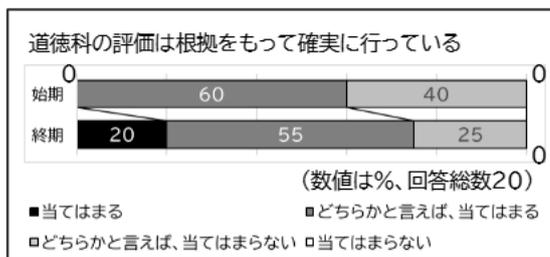


図18 指導者質問紙調査の結果

Ⅶ 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

- (1) 指導者が中学校道徳科における「評価の視点」を踏まえて授業を構想することで、目指す生徒の姿を指導者が具体的に想定することができ、ねらいとする道徳的価値を実現するための授業づくりを実践することができた。
- (2) 生徒が自らの学習履歴を「M-ログ」を活用して記述・蓄積し、整理・見直すことで、より体系的な振り返りとなり、自らの学びの成果や道徳性に係る成長を実感することができた。
- (3) 生徒が蓄積した学習履歴を指導者が組織的に分析することで、授業の課題や生徒の学習状況を把握しやすくなり、授業改善につながった。

2 今後の課題

- (1) 「M-ログ」の活用を通して、生徒自らが成長をより実感できるように、「M-ログ」の内容や活用方法の工夫、さらに道徳科の年間指導計画や教材の配置の見直しなどを進める必要がある。
- (2) 「M-ログ」に蓄積された生徒の学習履歴を、道徳科の授業改善や生徒への評価とフィードバックに、より効果的に生かすことができるよう、個人の「M-ログ」を学級や学年全体で集約する方法やそれを分析する視点についての検討が必要である。
- (3) 学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育の視点から、他の教科や学校生活と道徳科の授業での学びを、生徒が結び付けることができるように、中学校3年間での見通しをもつ必要がある。

文 献

- 1) 文部科学省「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道徳編」、平成30年(2018年)
- 2) 文部科学省中央教育審議会「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)」、令和3年(2021年)

研究協力校

大津市立青山中学校
彦根市立中央中学校

研究協力員

大津市立青山中学校	南里 唯奈	上田 剛士	伴 真滋
	山内亜希子	林 純子	
彦根市立中央中学校	辻 光平	米澤 一哉	小川 路都
	長野 滉平	糸井 諒	